



Title	ホフマンスタールの『アンドレーアス』論
Author(s)	安高, 誠吾
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 119-129
Issue Date	1993-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25954">https://hdl.handle.net/2115/25954</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P119-129.pdf



## ホフマンスタールの『アンドレーアス』論

安 高 誠 吾

### I

1910年スイスのチューリッヒでふとした偶然から通例『ウル・マイスター』と呼ばれるゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』の写本が発見された。それはドイツ文学史上の大事件であった。『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』と並んでその原型である『演劇的使命』を同時に読むことが出来るようになったことへの驚きと幸運をホフマンスタールは『《ヴィルヘルム・マイスター》の原型』の中で次のように書いている。「こうしてわれわれは [...] 28才、30才、35才のゲーテが没頭した作品と並んで、42才から47才の間に改めて着手し、完成させたあの作品を持つことになった。われわれは既にあの独自の様式の宏大な、宮殿のような住居を知っているし、そしてそれが古くて狭い市民の家の基礎の上に建てられていて、その家の壁や階段や部屋の多くが新しい住居の中に取り入れられていることも知っている。ところが以前の家がわれわれの目の前に現れ、ふたつの家が並んでいるのを見て、比べる事が出来るようになった。そしていまあの建築師に対して限りない驚嘆の念を覚えるのである。」(P III72)<sup>1)</sup>そしてホフマンスタールは原型と完成されたふたつの『マイスター』を前にして次のように想像する。もしわれわれがこの未完に終わった『演劇的使命』だけしか知らなくて、それを書き継ぐとしたら、どのように完成させるだろうかと。おそらく人それぞれに、ゲーテが残したおびただしい登場人物や挿話や細部を基にして様々に展開させるだろう。しかしどんな風書き継いだとしても、それらは『修行時代』に決して及ばないであろう。何故なら、「あらゆる人物がまるで神聖な媒介物の中で活動しているかのよう描き出した、あの驚くべき精神的な照明力をわれわれの中に生み出すことはできないだろうし、また各々の細部がそれに続く細部によってより高い光を投げかけられ、各々の出来事が全く自然な連関によって、より高い意味を帯びて現れてくる、そのような連鎖の神秘を自分で見つけ出すことは決してできないであろう」(P III77) からだ、と述べている。

このエッセーが書かれた1911年、ホフマンスタールはまさに自らの教養小説『アンドレーアス』の構想のさ中にいた。この作品の成立に触れると、作品の構想は1907年に始まり、1912年と1913年に全体のほぼ4分の1と思われる冒頭の部分が書かれ、その後中断をはさみながら1918年まで継続が試みられるが、ついに完成することなく終わり、継続のための創作ノー

トが残されることになる。われわれはこの創作ノートをてがかりにして、『アンドレアス』の全体の概要をほぼ知ることはできるが、『演劇的使命』と同様、実際それがどのようなものになったかはむろん知りえない。しかし奇しくも発見された『演劇的使命』と照らし合わせることによって感得した『修行時代』の「精神的な照明力」と「連鎖の神秘」を、ホフマンスタールが自らの作品で実現させようとしたことは想像に難くない。本稿では、『アンドレアス』の中で唯一完結した挿話、即ち、ヴェニスへの途中ケルンテンの山村でのアンドレアスの体験を取り上げ、その次第を追ってみたい。

## II

ケルンテンの断章はアンドレアスがヴェニスに到着した第一日目、1778年9月17日という日付になっているが、通りすがりの男に案内されて宿泊することになったある没落貴族の家で、両親宛の手紙の文案を考えている際に思い出された出来事として書かれている。従ってこの断章は『アンドレアス』の構想された全体から見れば、ほんの部分的な挿話にしかすぎない。しかし単なる挿話と呼ぶにはこの断章は余りにも美しく、みずみずしい輝きに満ちている。うねるような文体の流れの中で、出来事と夢と風景が、恐怖と歓喜が、禍いと至福が混然と一体になり、ひとつの球体の世界となって光を放つ。アンドレアスのケルンテンの山村での体験を読むわれわれは、そこで語られていることを途切れることのない一連の出来事として経験する。ヴィラッハの宿でアンドレアスの前にゴットヒルフが現れてからアンドレアスがフィナッツァー家を去るまで実際は5日間のことが語られているのだが、われわれはほとんどその時間の経過を感じることはない。それよりもむしろ、夢がそれを見ている当人に時間を感じさせないように、その間に起こったことが時間的継起を越えて全体として立ち現れる。その印象はメルヘンあるいはノヴェレのそれに似ている。

このような印象を惹き起こすさしあたっての原因を、この箇所がアンドレアスの回想として語られるという設定に求めることができるだろう。回想では体験したことどもが像として一挙に蘇る。その際出来事の時間的順序は二義的な意味しか持たない。回想という設定に従って、語りの視点はアンドレアスの視点に一貫して合わせられ、語り手による介入は僅かの箇所以外はほとんどなく、それ故われわれはアンドレアスが体験したことに直に向かい合うという印象を持つ。しかしケルンテンの5日間の出来事をいわば無時間的な全体的なイメージとして描出できた最大の要因は語りの技法であろう。この作品に限らず、ホフマンスタールの散文作品の語りの特徴は、始めから終わりまでほとんど切れ目なく連々と続く文体にある。語りは会話や主人公の独白や夢想によって分節化されることはない。まして他の登場人物の視点からの語りや語り手の介入によって分断されることはほとんどない。この作

品の場合でも物語中の出来事、会話、主人公アンドレーアスの空想や夢そして風景描写など、すべてが一次元化され、切れ目のない語りの流れの中に融合する。この一次元化の技法が語られる出来事を無時間的に総合する。もうひとつは、ひとつの出来事が変形されて後の出来事と重なり融合する重層化の技法である。これにより出来事は継起の時間秩序を越えて、統合された全体を作りだす。具体的な例を見てみよう。

ここじゃあ15にもなれば生娘なんぞはいやしない、お大尽のお嬢さまだろうが、乳しぼりの女だろうが、部屋の戸をしめずにおくのが好きな所はおんなじなんで。今日はこの人にあげましょ、明日はあの人にあげましょ、って具合だから、結局誰でもお恵みにあずかれるってわけで。—アンドレーアスは胸に火がついたようで、熱いものがはげしく咽喉を衝き上げてきた。しかし何かをいおうと思っても、舌がままならなかった。拳をかためて、横着者の口をなぐりつけてやればよかったのに—なぜそうしなかったのか？相手はふと気配を感じ取ったのか、半歩後じさりした。しかしアンドレーアスの思いはあらぬかたへさまよいいでていた。瞳がふるえてさだまらぬままに、彼はロマーナが闇の中で寝間着姿のまま、清楚なベットに腰かけているのを見た。裸足の足をベットの上に引き上げて、戸の引き手を見つめているのだった。先ほど彼女は、自分の部屋はここだと教えてくれたではないのか、隣に空き部屋があるともいったではないか。おまけにベットの話までして。こうしたすべてが、山にかかる狭霧のように、彼の前をただよって行った。彼はこんな考えにかかずらうまいと思った、妄想から身をそむけようとした—思わず知らず、そのはずみに彼はしたたか者に背を向けてしまった。こうなれば、またしてもむこうの勝ちにきまっていた。(E 140 f.)

テキストでは次のようになっている。

Da seien sie schon mit fünfzehn keine Jungfrauen mehr, da lasse des Großbauern Tochter ihre Kammertür ebenso gern unverriegelt wie die Kuhmagd die ihre, heute dem, morgen jenem, so komme ein jeder auf seine Rechnung.—Dem Andreas war eine Hitze in der Brust und stieg gewaltsam die Kehle herauf, aber keine Rede löste sich ihm von der Zunge; er hätte dem mit der Faust ums Maul schlagen wollen — warum tat er es nicht? Der andere spürte was und trat einen halben Schritt zurück. Aber Andreas war wo anders, seine Augäpfel zitterten, er sah Romana im Hemd im Finsternen auf ihrem reinen Bett sitzen, die nackten Füße hinaufgezogen und auf die Klinke schauen. Sie hatte ihm ihre Kammertür gezeigt und daß daneben ein leeres

Zimmer war, und von ihrem Bett geredet, das alles ging vor ihm hin, wie ein Bergnebel. Er wollte den Gedanken nicht nachhängen, sich davon abwenden — unwillkürlich kehrte er dem Kerl nun den Rücken, und da hatte der wieder gewonnenes Spiel.

ここでは、ゴットヒルフの話しの間接話法による再現、それに対するアンドレーアスの憤り、相手の無礼を咎めえなかったことへの後悔、アンドレーアスの内心の憤りを察知したゴットヒルフの反応、ゴットヒルフの話しに刺激されたアンドレーアスの妄想、その妄想を裏付ける事実、そして妄想を振り払おうとした結果の不本意な敗北。こうした異なる次元の事柄が切れ目なく一連の語りの中で融合されている。それ故この一節を読んだわれわれは、多次元にわたるアンドレーアスの心の揺れをひとつの像として思い描くことができるのである。以上が一次元化の技法と仮に呼んだ語りのおおよその内容である。重層化の技法については、後に別の場面を例にとって述べることになるが、ここでは、引用した場面が、アンドレーアスとその夜の夜口マーナの部屋に忍び込むという場面に引き継がれるということを指摘するだけにとどめておく。

アンドレーアスのケルンテンでの滞在を読んだわれわれは、そこで語られていることが、整然とした秩序を持った、リアリスティックな出来事ではなく、現実の輪郭が剥離した、夢のような心象を前にしているような印象を持つ。その原因はふたつあると思われる。そのひとつは上で見たように、出来事の報告、会話、描写、独白などの語りの要素を切れ目なく融合させた文体であった。もうひとつはそこで語られる内容、つまりケルンテンの山村でのアンドレーアスの神秘的な体験である。もっとも特徴的なものを指摘すると、アンドレーアスの時間体験と、相互浸透と言いたいような現実と夢との照応である。以下ふたつの場面を例にとって検討したい。

### III

上に引いた例からも窺うことができるように、小貴族の息子アンドレーアスは極めて人からの影響を受けやすい、夢見がちな青年である。強引に自分を売り込んできたゴットヒルフを、優柔不断と見栄とから従僕にしてしまい、結局ゴットヒルフにまんまと栗毛の馬と路銀の半分以上を奪われる。このどこか頼りないお人よしぶりはメルヘンの「抜け作」を思い起こさせる。そもそもヴェニスへの旅も親が命じたから出かけたというように、万事に対して受動的である。だからアンドレーアスに、例えばヴィルヘルム・マイスターの「自分の中に眠っている善と美の素質を、それが精神的なものであれ肉体的なものであれ、ますます発展させ錬磨したいという願望」<sup>2)</sup> という若々しい気概を期待することはできない。それ故にア

ンドレーアスの教養小説の主人公としての資格を疑い、そもそも教養小説としての『アンドレーアス』の構想に否定的な断定を下す見方もある。<sup>3)</sup> 実際、創作ノートからはこの作品の教養小説として大筋を窺い知ることができるものの、ケルンテンの断章を含む完成された部分を読む限りでは、教養小説的な要素を見いだすことはむずかしい。しかし、ケルンテンの断章に限って言えば、それを教養小説的と呼ぶかはとりあえず別として、アンドレーアスのある種の「素質の発展」を見ることは可能であると思う。結論的に言えば、それは受動的な素質の深化である。

アンドレーアスは他人から影響を受けやすく、他人の生が彼の中で純粹に、力強く保たれている。それはちょうど、他人の一滴の血、あるいは吐いた息がガラス管に入れられ、強い炎にかざされるように、そのように他人のさまざまな運命がアンドレーアスの心の中にある。アンドレーアスはあの商人の息子（『672夜のメルヘン』）に似ている。他人の運命の幾何学的な場なのである。(E243)

ホフマンスタールが『アンドレーアス』で描こうと思ったのは、ヴィルヘルム・マイスターのように自己の素質に確信を抱いた者の発展に対して、自らは積極的に善を為しえない受容的素質の積極性、受動的であるが故に濟らされる自我の豊饒化であったに違いない。それを敢えて公式化して言えば、「善」と「美」の「第一原因」としての自我ではなく、その「媒体」としての自我の積極的な意味の追及ということになろう。物語に即して言えば、この内面の豊饒化は、現象的にはアンドレーアスの時間体験の深化として語られる。

ヴィラッハ宿を発ってフィナッツァー家に到着するまでは、アンドレーアスは単なる点としての現在の中にあっただが、ケルンテンの山村で過去と現在が結びついた世界を知る。フィナッツァー家の一族、ロマーナの早世した兄弟姉妹が眠る墓地を好むロマーナ。彼女がアンドレーアスに見せるケルンテン名家図鑑と銅版画の地獄図。鷲の雛を取るのを唯一の仕事とし、妻が死ぬたびに4度もより美しい女性と結婚し、最後の妻と共に洪水に流され、命を断ったロマーナの祖父。ここでは、血族結婚による血の劣化という暗い事実すら包み込んで、過去と現在が晴れやかに融合している。「ロマーナはなんでも知っていて、知っていることをすべて、無邪気にあっさりといいあらわすのだった。アンドレーアスは、水晶の玉に見入っているような心地だった。その玉の中に全世界が存在していた、汚れを知らぬ清らかな姿のままに。」(E135)ロマーナによって、このような世界を知ったアンドレーアスは、寝床の中でこれまでになく年老いた両親を想い、ロマーナを妻として血族を支え、両親の労苦に報いたいという願いを空想の手紙で書きつづる。がしかし、その空想は不安な夢へと変わって行く。「彼はほしいままな夢から夢へと沈みこんで行った。これまでに味わったすべての恥ずかし

さ、いたたまれぬ思いや不安な思いのすべてが一つに集まり、幼年期少年期のありとあらゆる苦しさ切なさを、もう一度彼はくぐり抜けねばならなかった。」(E145)ケルンテンの山村が過去と現在の融合に安らいでいるとすれば、アンドレーアスの場合、過去は現在を脅かすもの、罪を負ったものとして想起される。それは何故であろうか。

きわめて強烈な現在をもつ人間は、現実の危機を除いては、決して恐怖を覚えない。何故なら恐怖はその条件として常に何か無理に引き込んだもの、現在ではないものを必要とするからである。(E245)

(アンドレーアスの)少年時代の思いの中では、何かひどく錯綜したものが残されているが、それを解決するには、全生涯をかけてもほとんど充分とはいえない。自分の幼年時代と和解して死ぬこと。(日記「ぼくはぼくの少年時代と和解して死にたい」)(E222)

いづれも創作ノートからの引用であるが、ここから過去が現在にいまだに取り込まれていないが故に、過去は「恐怖」としてアンドレーアスを脅かすという答を引き出すことができるだろう。では「過去との和解」はどのように訪れるか。ゴットヒルフの犯行の後、失意のアンドレーアスは行くあてもなくさ迷うちに、かつて子供の頃野良犬の卑屈な態度に腹を立てて、踵で背骨を踏み折って殺したという忌まわしい記憶が蘇ってくる。だがアンドレーアスは自分が小犬を殺したという事実をまだ引き受けることができない。「これは本当に自分がしたことだろうか、どうなのだろうか、おぼつかない気持ちだった。」(E155)創作ノートにも「彼がはたしてあの犬に対する犯罪を本当に犯したのかどうかという疑問」(E195)というメモがある。この犬殺しという出来事は、いまだ現在に組み込まれていないが故に現在を脅かす過去の象徴である。しかし一瞬のためらいの後、彼はこの事実を認める。「彼から生じたことにはまちがいないのだ、„aber es kommt aus ihm“」(E155)この時アンドレーアスは過去と現在の融合の徴を感じる。「このようにして、無限なものが彼にふれたのだ。」(E155)その後、アンドレーアスは森の中でフィナツァー家の下男がゴットヒルフによって毒殺された番犬を埋めているのを目撃する。下男が去った後、彼は番犬の墓の上に身を投げだす。この時アンドレーアスは、自分が子供の頃殺した小犬とゴットヒルフに殺された番犬との間に不思議なつながりを直感し、現象の背後に時間を越えて存在する世界を悟る。

ここだったのだ！ と彼はひとり呟やいた、ここだったのだ！ どれほどあちこちとかけめぐっても、それは所詮空しく、自分から逃れることはできないのだ。ひとは何かに引かれて、あちこちへと出て行く。両親はぼくを遠い旅へと送りだした。しかしその旅路は

ついにはどこかで終わるのだ。その終わりはまさにここなのだ！—彼と死んだ犬とのあいだには何かのつながりがあった。ただ彼にはそのつながりが分からなかったのだ。同じように、彼と犬を殺したゴットヒルフとのあいだにも何かのつながりがあった—またあの小犬と番犬のあいだにも。それらすべてがあちらこちらに関連をもち、そこからひとつの世界が紡ぎ出されるのだ、現実の世界の背後にあって、現実の世界ほど空しくも荒涼としていない、ひとつの世界が。(E156)

勿論「過去との和解」がここで完全に成立したと言うのではない。しかし、ふたつの犬殺しを媒介として、これまで「恐怖」として拒まれていた過去が現在の中に流入し始める。同じようにゴットヒルフという人間の存在も。それはまだケルンテンの山村やロマーナのような晴れやかな融合とは言えないまでも、少なくとも「和解」の端緒であり、自我の豊饒の始まりである。ここにアンドレーアスの「素質の発展」を見ることができる。

ここで再び教養小説にこだわると、伝統的な教養小説とホフマンスタールが企てた教養小説との質的な相違があるといえる。それは主に物語の中の時間というものの相違である。伝統的な教養小説では、主人公の成長が過去、現在、未来という固定的なクロノロジーに従って展開される。そこには「時間はわが畑」というゲーテの言葉に見られるような確信が支配しており、時間は自我の発展の最大の契機として把えられている。それ故に伝統的な教養小説では、主人公の旅は数年あるいは数十年にわたる時間の広がりの中で展開され、その間に主人公の成長が物語られるのが通例である。しかし『アンドレーアス』の中の時間はそのような直線的に、不可逆的に流れる時間ではなく、過去、現在、未来が相互に混じり合い、融合する時間である。それ故僅か5日間の出来事は、アンドレーアスにとって古典的な意味での時空の旅ではなく、言うなれば時空の間の垂直的な旅であった。

語り手が [...] 自分の時計を打ち毀し、もはやクロノメーターでは測りえない新しい時間を探そうとする瞬間に、現代の散文が始まる。前後は同時の中に溶解し、歩みと継続は同時存在に代わられ、想念と印象が年代記の秩序をときほぐし、昨日と明日は今日の中に収斂し、そして時間は互いに纏れて絡みあう。<sup>4)</sup>

このヴァルター・イェンスが『針のない時計』でブルーストについて述べた言葉は、そのままホフマンスタールのこの散文作品に当てはめることができるだろう。さらにジョルジュ・プーレは『人間的時間の研究』の中で「時間の秩序から解放されたある瞬間が、その瞬間を感じるために時間の秩序から解放された人間を、われわれのなかに再創造したのだ。」というブルーストの言葉について次のように述べている。

というのは、われわれによみがえる感覚、そんな遠くからわれわれによみがえってくる感覚は、いまわれわれを運び去る時間の運動に結びついているのではなくて、そのような流れから一瞬われわれはひきはなされているということである。われわれは「自分をつまらない、偶発的な、はかない生命をもったものと感じる」のをやめる。われわれは自分を自由であると感じる、自分自身で自由に決定することも、かつて自分がそうであったものなかに自由に自分を認めることも、過去と現在とのあいだに自由に暗喩的な関係をうちたてることもできるのだ。<sup>5)</sup>

アンドレーアスがふたつの犬殺しの中にある必然的な関係を認めた時、彼がふれた「無限なもの」とはこのような「自由」だったのである。

#### IV

次に検討する場面は、フィナツァー家に到着した一日目の夜にアンドレーアスが見る夢の場面である。夢の中でアンドレーアスは服をはだけて、裸足で走り去るロマーナの後を追う。場所はウィーンの両親の家の近くの小路。ある家のアーケードの中に姿を消したロマーナを追って行くと、次々とおそろしいものがアンドレーアスの行く手を阻む。目付きのこわい教理問答師、いやらしい少年の顔、そして少年のアンドレーアスに轢で腰骨を打ち砕れた猫が、蛇のようににじり寄ってくる。恐怖のあまり叫びそうになる。その時女の叫び声が聞こえる。隣の部屋でロマーナが殺されかけていると思い、壁の作りつけの箆筒をくぐり抜けて助けに行こうとするが、箆筒の中は両親の古着で一杯で、もがけど前に進まない。ここでアンドレーアスは夢から醒める。この夢は物語の中でこの場面の前で語られている出来事と後で語られる出来事を素材として紡ぎ出されている。夢の場面の前の出来事を簡単に迎ると、アンドレーアスは床に入る前に、廊下に出て、ロマーナの両親が寝室で話しているを思いがけず立聞きする。そして少年時代に壁の箆筒ごしに聞いた彼の両親の会話を思い出す。その後、ロマーナが自分を待ち受けていると思い、ロマーナの寝室に忍び入るが、それは期待外れに終わる。部屋に戻る途中、月明かりの中で、ゴットヒルフによって毒を飲まされた番犬が苦しんでいるのを見るが、アンドレーアスはそれとは知らず、犬の様子から年老いた父親の死が近いことを思う。そして両親宛の手紙を空想の中で書きつづるうちに、いつしか夢の中へ陥る。後で語られる出来事とは、前章で見た子供の頃小犬を殺した記憶である。このような出来事が重ね合わされ、変形されて、この夢を形成していることが分かる。

しかし、この場面で注目したいことは、このように現実が夢を喚起するというのではなく、この夢と平行して、ゴットヒルフの犯行が同時に起こっていることである。即ち、ゴ

ットヒルフはこの夜、餌に毒を盛って番犬を殺し、フィナツァー家の下女と通じ、刺青から脱獄犯であることがばれると、下女を縛り、火をつけて、アンドレーアスの鞍に縫いつけてあったお金ごと馬を盗んで逃げる。アンドレーアスが夢の中で聞いた叫び声は、この下女の叫び声であった。「その叫び声が、永劫の地獄の呪いを思わせるひびきを伴って、アンドレーアスの夢の深みまでくだったのだ」。(E148)夢の中では、外からの刺激が夢に繰り返されて、事後的に夢のテキストを作るのだから、外で起った叫び声が、夢を見ている者に叫び声をあげるさせるような恐怖を夢見させたのだ、というように合理的に説明することができる。だが、アンドレーアスの夢を追ったわれわれには、このような合理的説明とは逆に、アンドレーアスが夢の中であげそうになった叫び声が、夢の外の叫び声を惹き起こしたと感ずるのではないだろうか。そしてこの場面で、叫び声が媒体となって、夢と夢の外の出来事が接合され、融合されているという不思議な印象に囚われるのではないだろうか。夢から醒めたアンドレーアスは、家の中の慌ただしい気配を感じ、ベットを降り、服を着る。

そうしながらも彼は、刑吏に呼ばれてめざめた死刑囚のような心地がしていた。夢が、昨日の一夜がまだあまりにも重くのしかかっていた。何か重い罪を犯したのだ、今すべてが明るみに出てくるのだ、そんな気が彼にはした。(E147)

だから、ことの次第を知ったアンドレーアスが受ける衝撃は、単に従僕が犯した罪は主人の責任というような性質のものではない。彼はゴットヒルフの犯罪を自らの「重い罪」、苦しみに満ちた夢の外化と感じたはずである。それはちょうど前章で見たように、アンドレーアスがかかって犯したかも知れない犬殺しが、ゴットヒルフを通して外化されたと感じたことと同一である。つまり、ゴットヒルフの犯罪も「彼から生じたことにはまちがないのだ、aber es kommt aus ihm」。勿論、物語の中ではそのように明言されている訳ではない。しかし、出来事と出来事を重ね、出来事と夢と想念を重ねる重層化の語りや、そのような印象を、そのような「読み」の可能性を作り出す。そうすると、ヴィラッハ宿で不意に姿を現すゴットヒルフ、そしてローマナやケルンテンの山村での出来事はすべて、アンドレーアスから生まれた出来事だと言うこともできるのではなからうか。何故そうなのか。それはアンドレーアスが出来事すべての「媒体」、つまり「他人の生が純粹に、力強く保たれている、他人の運命の場」であるからだ。だからここで語られるすべてが、彼の内面の顕現であるといえる。しかしアンドレーアスは、それらをまず「おそろしもの」、「罪」として体験しなければならなかった。何故ならば、ゴットヒルフの犯罪も犬殺しも、アンドレーアスがそのような「場」としての資格を有するかどうかを問う試練であったからである。それは同時にホフマンスタールが構想した教養小説の主人公たりうるかの第一次審査でもあった。禍いを自らの内面の

こととして引き受けることによってのみ、受動的自我の積極性が予感される。すべてを内に受け入れることは、すべてをまた外へと送り出すことである。つまり外にあるものは内にあり、また内にあるものは外にある。自我はこのように関連の内にあり、また自我は関連を作りあげる。それがアンドレアスがケルンテンの滞在で予感しえた内実のすべてである。この予感を感じた自我の延長線は、ホフマンスタールが定義した詩人の姿と交差する。

詩人は過去と現在、動物と人間と夢と事物、広大なものと微小なもの、崇高なものと卑俗なものから、関連の世界を作りだすのです。(P II245)

荷馬車に乗って谷を下るアンドレアスは一羽の鷲を見る。その時、彼に生涯最も幸福な瞬間が訪れる。この鷲はアンドレアスが修行の果てに到達すべき自我の姿のヴィジョンであった。

ゆるやかに輪を描く鷲、その高みからはありとあらゆるものが見えていたのだ。フィナツァー家のある谷間も見下ろしているに違いない。あの家も、村も、ローマーナのきょうだいの墓も、あの鳥の鋭い目には、若鹿やはぐれた山羊を探す、この青い山峡の山かげと同じように、なじんだものだっただろう。[...] はるかな高みからの視線は、分けられているすべてのものをひとつにする。そして個々のものは他のものと結びつきえないという孤独は錯覚なのだ、と彼は感じた。どこであろうとローマーナは彼のものだった、どこでも望むがままに、ローマーナを自分の心の中に呼び起こすことができたのだ。 (E161f.)

かくしてアンドレアスはアルプスの娘ローマーナを自己の内に所有し、仮面と水の迷路の都ヴェニスへと下って行くのである。そこではアンドレアスの真の「修行時代」が始まるはずであった。

## V

ヤーコブ・ヴァッサーマンによれば、ホフマンスタールから『アンドレアス』の計画を聞いたのは1907年で、この計画を打ち明けた数週間後にホフマンスタールはケルンテンの断章をヴァッサーマンに読んで聞かせたという。<sup>6)</sup> その時朗読されたのが、ケルンテンの断章の全部かそれともその一部であったかどうかについてはヴァッサーマンは書いていない。しかし少なくとも、この断章が早い時期に書かれたということは知ることができる。それでは、この断章は『アンドレアス』という小説全体に対してどのような意味を持つのだろうか。

それはおそらく、この断章は主人公アンドレーアスの性格規定として、また標題の『合一した人々』が示している物語の展開の予示的な挿話としてまず最初に書かれ、物語の冒頭部分に挿入されたのであろう。それ故にケルンテンの断章を小説全体の圧縮された見取り図とよぶことができるだろう。比喻をもっていうと、小説全体を交響曲であるとするれば、この断章は同じ楽想によって書かれたソナチネである。

しかしわれわれはついにその交響曲を聞くことができなかつた。しかし、それ自体完成した短編ともいうべきケルンテンの断章を読み終えたわれわれは、ホフマンスタールが『《ヴィルヘルム・マイスター》の原型』で述べた言葉を、彼自身の未完の小説『アンドレーアス』に対しても繰り返すことになるにちがいない。

たとえそれが断片であるにせよ、もしわれわれが『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』だけを、ひとつの書物のトルソともいうべきこの断片だけを、ヴィルヘルムやミニヨンやフィリーネやアウレリエを伝えてくれるこの本だけを持っていたとしても、それはやはり意味深い内容豊かな比類のない本であるだろう。(P III73)

#### 注

- 1) ホフマンスタールのテキストはすべて Hugo von Hoffmannstahl Gesammelte Werke in Einzelausgaben. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1968 を使用した。このテキストからの引用箇所は本文中に示す。なお Die Erzählungen は E、Prosa II は P II、Prosa III は P III と略記し、アラビア数字はページ数を表す。なお『アンドレーアス』の訳出にあたっては川村二郎訳『アンドレーアス』(講談社、世界文学全集81)を参照させていただいたが、必要に応じて変更した箇所がある。
- 2) Goethes Werke 7. Bd. Christian Wegner Verlag, Hamburg 1965. S. 276
- 3) たとえば井上修一論文「ホフマンスタール『アンドレーアス』—教養小説的側面の考察」：「教養小説の展望と諸相」(しんせい会編集、三修社)収録
- 4) Walter Jens: Statt einer Literatur. Günther Neske Verlag, Pfullingen 1962. S. 19
- 5) ジョルジュ・プーレ『人間の時間の研究』(井上究一郎 山崎庸一郎 他訳、筑摩書房) 425頁
- 6) ヤーコブ・ヴァッサーマン「『アンドレーアス』後語」(大山定一訳、筑摩書房、筑摩世界文学大系) 77頁

(北海道教育大学岩見沢校助教授)